

新潟県

平成7年

公民館月報

9月

第511号

特集 地域社会を生きる — I



湯沢高原高山植物園
「アルプの里」

世界最大166人乗りのロープウェイで標高1000mの別天地へ、1000種類ものアルペンフローラに出会えます。

湯沢町

(写真・資料提供、湯沢町公民館)

市部コミュニティづくり 第一分科会

「野次馬的にも参加してください」

(発 表)

県大会運営風景

「新潟の水辺を考え
る会」世話人相楽治氏
の実践発表をきき、生
物の命の水の大切さに
市民が改めて気づいた
経過と苦労と成果をス
ライドをふんだんに用
意しての発表に会員は
新鮮な感動を覚えた。

「新潟の水辺だより」

31号、32号を提供してもらい、
研究スケジュールの立て方、市
民参加の体制づくりでは「野次
馬的にも参加してください」と
いう気どらない呼びかけを見て
も活動への温い姿勢がうかがえ



準備風景

た。
各市の「コミュニティづくり
と公民館のかかわり方」の意見
交換が活発になされた。

また市教育委員会と生涯学習
係との関わり方について報告や
コミュニケーションが密なる地
域をモデルにして地区へ情報を
流して刺激を与えている例。分
館を廃止した例の功罪などに
ついて話し合いが続いた。

(出席者約二百七十名)

町部のコミュニティづくり 第二分科会

「竹とんぼ作り教室で世代間交流機関連携」

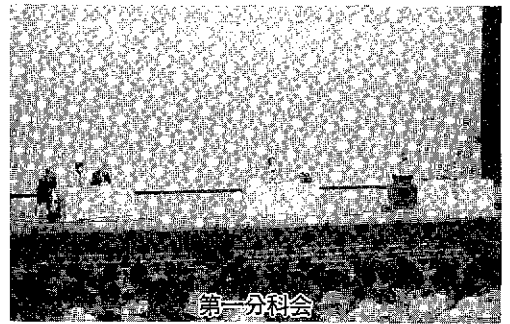
(発 表)

「新潟ふるさと

村」がオープンさ
れている黒埼町大
橋主事の実践報告
から分科会に入っ
た。指導者の実情
や事業の意義の説
明があつて、関係
機関(学校・町民
会議など)とのか
かわり方等の質
疑・意見が盛んに
出た。
コミュニティに
ついてどう考える



第三分科会



第一分科会

かという討議
の場面もあつ
た。
コミュニ
ティの概念を
訳語として
「地域社会」
「共同社会」
「地域共同社
会」等いろい
ろ表現されて
いるが「地域
性と共同体の
二つの要件を
中心に構成さ

れている社会」とらえて発言
や討議がすすめられた。

各町からの情報も次々と提供
された。自治能力をどうして高
めていくか、また「井戸ばた会
議」論や人材の活用の例、アド
バイザーの設定、福祉機関との
連携、ボランティア精神の啓発
や活動、自分の町に合う生涯学

村部のコミュニティづくり 第三分科会

「誰でもできるボラ活動を」

(発 表)

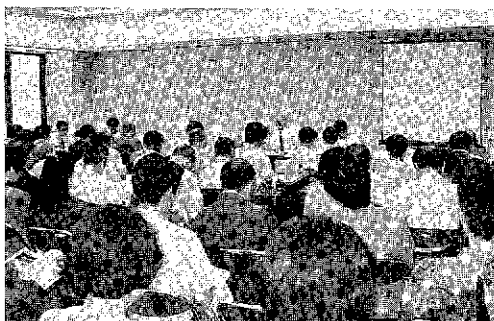
(出席者約百名)

第三分科会

「必要にせまられての「福祉
ボランティアの育成」」と題し
て、かざり気のない実践発表を
潟東村の藤田忠明氏からしても
らった。

出合いの人を大切にしてつな
いでいくという手法で取り組ん
だ姿が浮き刻りにされた。
「紫陽花」の挿し木がつなが
村人たちの夢と希望が伝わって
きた。

また村として、生涯学習全般
を通じてのボランティア活動の
組織のあり方、どこから手をつ
けるか、必ず村や村に勤めてい
る中にあるすぐれた人材を活用
する方法、住民意識の高揚はど
うして図るのか、リーダー育成
の悩み、女性の方が男性よりボ
ランティア意識が強いこと実践
力があるのはなぜか、とか話し
合われた。



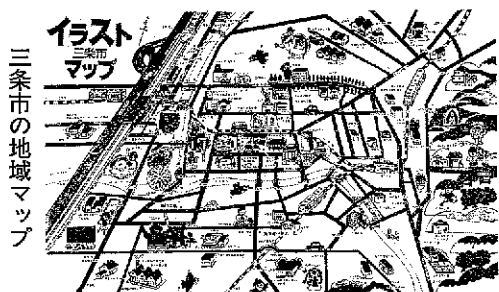
分科会の内容紹介は次号以降に
します

魅力ある公民館活動を目指して

第43回中越地区公民館研究大会

さる6月28日(祝)、加茂文化会館において、三条加茂南蒲地区連絡協議会主催で中越地区公民館研究大会が開催された。参加者は二百三十余名で、閉会式で小林秀夫中公連会長、伊藤笹男教育委員長の主催者挨拶、小池清彦加茂市長、熊倉官県教育庁中越教育事務所社会教育課長の挨拶、祝詞で開始された。

「国際化と地域」と題して暇名保彦新潟経営大学教授の講演のあと、渡辺厚志中越教育事務所社会教育課副参事の司会で、①「地域のふれあいと生き甲斐を目指して」三条市風南公民館 半間一夫氏、②「親子のふれあいを求めて」田上町前田国男社会教育指導員、③「地域の特色をふまえた村内の各施設の活用」下田村公民館長目黒悌一氏等の発表があつて盛会裏に終了した。



発表例 ▼

視点

親が燃えないと、子どもも燃えない。親が参加しないと、子どもも参加しない。機会を失ってしまう。こんなことを合言葉に地域子ども会に参加して二十五年をむかえました。

最近参加させていた



やり等々の活動は子ども会員、育成会員・老人クラブが一体となつた活動で共に汗を流す姿に心温まる地域の人間形成を見ました。収穫際も楽しみの一つで

地域づくり

高岡 美己

だいた二つの「地域づくり」を紹介します。一、村松町矢津川地区公民館活動では、子育て夫婦が中心となり、「さつまいも」づくりがあります。草取、畑打ち、苗植・毎日の水動が月二回〜三回行わ

れ、老若、子どもの参加が見られました。二地区とも、地域子ども会の発生地です。地域ぐるみで、地域で出来る活動こそが生活の文化として、大切な生活

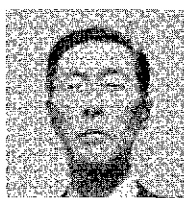
のリズムでもありません。幼年時代から地域の活動を通して連帯感のある人間形成がなされるようです。

「地域づくり」とか「生涯学習」は伝承文化の継承のみならず次代を生むための学習でもあります。住民一人一人の主体的活動こそ、生涯学習の基本であり、新しい地域づくりに発展することでもありましよう。

(町子連顧問。五泉市青少年育成相談室、相談員)

伝承芸能「米大舟」で地域の活性化

小林 茂男



二百数十年前、大潟町一帯は大剣鯨が続き悲惨な有様でした。

長、米大舟保存会の役員など無理矢理引っぱり出し、どうにか、六十才台から高校生までの三十数名の素人役者を揃えました。猛暑のなか連夜のけいこ、舞台装置や衣装など大変でしたが商工会の援助、酒田市からの友情出演もあり、実に感動的な演劇を上演することができました。冷房のない真夏の体育館一杯になった町民の方々が最後まで熱心に観ておられたことに関係者一同大変満足でした。

ひろば

一回限りの演劇では誠に惜しいという声もあり、今年には町の敬老会に是非という町からの話があり、再上演することになっています。さて「米大舟」ですが、大潟町のみならず、音頭、踊りは若干異なっているが、国内のあちこちで伝承されているものです。北前船の船頭達によって伝えられたようです。江戸時代、大潟町に救援米を送り、米大舟を伝えた亀田伊兵衛は、後に大潟町に住みつき、ここで亡くなりました。お墓も現存しています。(大潟町公民館 運営審議会委員長)

その様子を知った現在の山形県酒田市の北前船の船頭で亀田伊兵衛なる人が大変気の毒に思い酒田から大量の救援米を運んでくれました。その亀田伊兵衛により伝えられたのが、今現在、大潟町の無形文化財として伝承されている「米大舟」の踊りと音頭です。一昨年より、大潟町の商工会では、県の助成を受け、地域の伝承芸能と結び付けて、中小商業の活性化を図る企画がなされ、三年連続の「米大舟まつり」が始められました。今年が三年目となります。

さて昨年の米大舟まつりの中心として、公民館長の発案により、郷土史劇「白い米米大舟」が企画されました。脚本は専門家に依頼し、上演に向けてスタートしたわけですが、住民よりの出演者公募もたったの数名程度、やむなく公民館長や分館

さる七月二十八日(金)に、第四十六回新潟県公民館大会が、西蒲・燕公民館等連絡協議会の主催で弥彦総合文化会館で開催されました。

記念講演の講師の前田幹教授は、東北大学大学院教育学研究科博士課程を卒業後、昭和42年から新潟大学へ勤務され、新潟県の教育に長年尽力され、現在も県社会教育等の指導者育成や多くの研究を紹介されて成果を上げていられます。講師の了承を得て編集子がまとめたものです。新しい視点で人生、地域を見つめるキーワードを話されましたので二回にわたって掲載します。

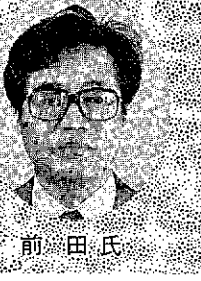
弥彦村の総合文化会館は、十七年前の竣工だそうですが、今でもこのように機能的に改築維持されているのに敬意を表します。最近、各市町村には立派な館ができています。公民館の施設や建物もそうですが、各種の事業や学級・講座は十年前に比べると目をみはるものがあります。

教育産業といましようか。学校の延長線のような(子供を対象とする塾とは違う)ものが、多方面、多様に開放されるようになりました。しかしこれは「学ぶ」としては得るものがある点でも、人とつながりという点では少しもの足りないと思います。

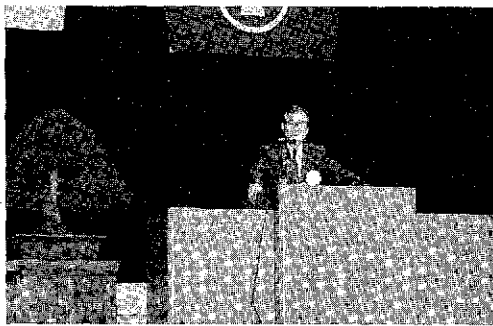
公民館というものは、つながり、学ぶ、学びつながっていく、という地域のつながり、実行するところ、一つの場であり、大切な役割を果たしています。これからも、ますます重要になると思います。

を追って 生きる I

前田 幹 氏



前田 氏



物が豊かになりました。だけどそこに、何かそぐわない。毎月が同じように過ぎていく。これでいいのだろうか、と思う。人生が軽く、重みのない、うつろな気がするというのを感じているのは自分ばかりでないようだと思われかけです。公民館大会でも以前から確認事項のように言いつづけてきた問題であろうと思われかけです。生涯学習の時代(人生の考え方そのものを考えていく)という大きな見方というものが一方

にありまます。生涯学習というものが「働く」ということより「学ぶ」ということを最大の目標として人生を広げてとらえる考え方で、一つの大きな衝撃を与えていると思います。「学ぶ」ということを「今さら——」と思う人は少なくありません。生涯教育、生涯学習という言葉が言われるようになった15年前の頃には「今さら学ぶ？」ということに疑問をもつ多くの人がいたわけですが、今はもう抵抗なしに「学ぶ」ということの必要性、大切さが理解されつつあるのではないのでしょうか。

伝統的な旧来の考え方からするならば「学校」というものを、主として学ぶというものに定義づけ、それが大切なこととして皆に認識されてきたわけですが、「教育イコール学校」「学校イコール教育」という考え方を打ち壊すことに努力をしてきた時代があったわけですが、今はもうそういう時代ではありません。自分の一生の中で、絶えず学びつづけるべきではないのだ、自分の考えを広げ、深めていくことが必要なのだというところが常識になってきています。時間的な面から言うならば、生まれたときから死ぬまで学ぶことの連続であるというこ

とで、「時間の拡散」といいます。いわゆる学校というものは、ある一定の決まった時間(ある年齢から始まってある年齢で終わる)という勉強する場所のことで、日本ならば、六歳の春から学校に行つて学ぶことが始まり、義務教育九年が過ぎると、あとは勉強するということには縁がない、一部の人の問題であると考えられていましたが、現代は生まれたときから死ぬまで「学ぶ」ということなしに生活がなり立たないし、自分の人生というものは広がっていくので、時間の拡散というのがこれです。

子供の生活を例にとるならば、子供には生活の場が三つあります。

一つは、学校です。

二つめは、家庭です。

三つめは、地域の人間関係です。

これらは、すべて子どもの成長というところで、共働しなければいけないという考え方が生涯学習の観点なのです。したがって学社連携が必要であり、家庭教育力が問題となっているわけ

われわれ大人でいうならば「職場」「地域」「家庭」の生活になるわけですが、これは、人生の張りや充実につながるもので

シリーズくらしの課題

特集 地域社会を

上越教育大学教授

「き方」の問題なのです。そういう意味からいうと、学習とか、学びとか、教育ということは、何か特定の狭さを感じさせるイメージがありますが、そうではなくて、「人間の生き方の問題」と考える必要があります。

つい最近のことからいいますと、一昨年「国際家族年」という国際的な運動がありましたね。また昨年の四月には、「児童の権利条約」が批准されました。そして、今年になって「エンジェル(子ども)プラン」というものが、一つの施策として発表されました。こういうことも、私たちの人生を考える一つのきっかけとなっているわけです。

例えば、「国際家族年」というものは、世界的なものですからいろいろ問題があります。日本に当てはまらにくいような問題もありますが、世界的に共通したことでいうならば、「地域の生活を豊かにしていくため」とか、もっと広く「国の生活を豊かにしていくため」には、それぞれ家族というものをと大切にしなければならぬということなのです。

「国際家族年」のシンボルマークのように、屋根の形の下に小さなハートと大きなハートが組み合わされています。すなわち、

屋根の下に、一つの家庭ができて上がり、その家庭の一人一人の生活を大切にしながら、より豊かなものにしていく。それが地域の生活を豊かにしていくことにつながり、ひいては国の生活をよりよい方向に進めていくことになるというふうに考えられます。

また児童の権利条約について、改めて考えてみますと、親は子どもに対して、教育に対する責任を負って、それを果たしているだろうか。または、子どもの教育に関して、親は十分に時間を割くことができる社会的な条件が整備されているのだろうか。

新潟県でも、ご承知のように、「児童の環境づくり」をとなえています。県の福祉計画の中に、「新福祉計画」というものが、漸くこの五月に示されました。その中に児童の環境づくりをうたっているのです。そういうと、すぐ「子どもの自然的な環境」「文化的な環境」を頭に思い浮かべるわけですが、それだけではありません、子どもに最も影響を与える親が、子どもを育てる条件を作っていくことだということなのです。これは親だけでなく、地域の大きな運動になるわけです。いわゆる「子育て期間」の親の労働時間の問題がありま

す。育児休暇の問題です。これらも全部児童の環境づくりなのです。また、われわれの家庭の中にも問題があります。人生全体の中でも、絶えず学び続けることの必要性がますます強くなり、生活の拠点がある「地域」においても、やはり問題があるのではないかと改めて気づくわけです。

一つには、年齢、職業、性別の関係なしに、人生の中で、絶えずぶつかるであろう問題、われわれが、より豊かな生活を考えていく場合に恐らくぶつかるであろう問題があります。

またわれわれのくつろぎの場であり、子どもに対してはさまざまな影響を与えている家庭の問題が二つめにあります。

もう一つは、地域におけるわれわれの生活の意識の問題があります。これらを中心にしてお話ししたいと思います。

教育の考え方というのは、一言でいうならば、プラスの方向を目指していくことなのです。ね。「なぜ学ぶのか」ということに対しては、答えは一つです。それは「よりよい生活、より充実した生活」を目指すためです。絶えずプラスの方向を目指しているものなのです。

そういう点から言うならば、「今ある」という状態から「さ

らによりよい状態」を実現していくというところが「学ぶ」という意味になるのです。端的な場合は「コミュニケーション」というものは、誰でも地域社会の中で生きられるにもかかわらず、なぜわたしたちはコミュニケーションを求めていくのでしょうか？どうして地域というものを問題にするのでしょうか？それは、そこには「今ある地域」をよりよくしていくとする方向が含まれているからなのです。

今の家庭は楽しいし、とりわけ問題もない。しかし、もっと子どもにとって、よりよい環境にするためにはどうしたらよいのだろうか？親はもっと考える何かがないのだろうか？ということを追及していく。

これがいわば家庭の問題にする一つの理由になるわけです。そういう意味からいうならば、「ある状態から、あるべき状態」へと思考していくことなのです。人生の問題、家庭の問題、ならびに地域の問題というものもみなそうです。固苦しい言葉を使わせてもらえば「存在(今ある状態)から、当為(あるべき状態)へと考えるのは当然のことですが、人生についての疑問、または家庭についての反省、地域のことについて、こ

ういうことを考えていかなければ

これを一般的にいうならば、時間的、空間的(場所的)な柱から生涯学習というものが定義づけられるのです。地域の中で皆が活動する。これも生き甲斐の問題であり、親がもっと教育に関心をもちなければならぬという自覚をする。これもまた生涯学習の一つの現れであります。いふなれば生涯学習は一つの大きな衝撃です。今日でもまだ生涯学習を片手間のこと、不要なことであり、それを必要とする人たちだけの問題だととらえがちの感があります。そうではなく、全ての人の必要な「生

ばならないのではないかと
解答が出てくるのではない
でしょうか。

そういう問題点というものを
採り上げることによって問題を
克服し「今ある存在から当為」
への手だてを考えるという手法
を「パリア理論」といいます。

この理論をご存知の方が多い
と思いますが、今日の話の中
のいくつかの問題のうち必ず今
後、新聞の文化欄、家庭欄、社
会欄に出てくる用語になるだろ
うと予想される言葉の一つで
す。

「パリア理論」は最近、特に
アメリカで論述している人が非
常に増えてきています。一般
化されていく傾向があります。
「パリア」という英語には大変
広い意味があります。

「勉強しても、勉強しても成
績が上がらない」とよくいま
す。なぜだろうか。そこには何
がある筈です。これがパリアな
のです。夫婦はいつもいい関係
にありたいので、妻は、せっか
くにここにこしているのに、夫は
なぜむっつりしているのだらう
かと思う。その原因というもの
がパリアなのです。つまり「障
碍」「躓」何かやるときにそれ
を阻むものが、パリアです。英
語辞典でBARRIERをひい
てみてください。自分の目や耳

で確かめ書いてみるというの
が、いちばん覚え易く定着しやす
い方法です。公運審の会議などで
このパリア理論で、「公民館活動
がなぜうまくいかないか」を分
析する手法のことばとして紹介
してみてください。

「パリア」ということばは、
私たちの生活の中で、おそらく
五年後、十年後、いや二十年後、
三十年後もあり続ける要因があ
るのではないのでしょうか。

かつて、働かざるものは食う
べからずという時代には、お金
が重心をもっていました。お金
さえあればこうでできるのだがな
あと考えることが多くありまし
た。だからお金がパリアだった
のです。ところが、この「お金」
というパリアはなくなりまし
た。勿論それはかなり苦労はい
りますが、「物」という条件はさ
まざまな形で解決できる時代にな
ってきました。昔は、親から
受けついだ家を大切にすると、家
という建物を大切にすると、家
という時代がありました。今は一
生のうちに家を一回建てたいと
いう願ひもだんだん実現するよ
うになりました。少し裕福な人
が、一生のうちに二度も家を建
てたりすると「大したものだ」
といわれるような時代になりま
した。といいますのも、その為
にお金を借りお金の工面で頭が

いっばいということはありません
しょうが、少くとも「ある時代
にパリアであったものが「今は
パリアでなくなつた」というも
のがいくらでもあるわけです。
ところが、十年後も二十年後
でもパリアであり続けるものが
やはりあるのではないだろうか
と思います。私たちの人生はパ
リア(障碍、躓き)または壁と
いうものに満たされていると思
います。

その一つがストレスという問
題です。ストレスという言葉は
いろいろと定義されています。
十年前に皆さん「ストレス」と
いう言葉を使っていましたか。
使っていた人が、もしいたなら
ば、その人は感覚的に早い人と
いえます。

むしろ職業的な用語として使
用されていたと思います。少し
詳しい辞典にはこのストレスと
いう項目には大量なスペースを
使っています。それほどストレ
スは現代生活の問題点のパリア
ではないのでしょうか。

ストレスというものにはいろ
いろなものがありますが、一昨
年の調査の統計によりますと、
医者もストレスにかかっている
し、看護婦さんはアルコールを
常用していたり、タバコも吸う
人が他の職業の人に比べて圧倒
的に多く、これは殆どストレス

が原因だといわれています。
「医者に「ストレスを感じてい
ますか?」と質問すると、「感じ
る」という人が非常に多くなっ
てきています。ということは、
まして平凡なわれわれのは、医
学の知識はないわけですから、
当然ストレスにかかり、生活を
乱されていることが大変多いと
いうことになります。ストレス
の原因はいろいろありますし、
年齢によっても変わります。ス
トレスの原因をストレスサーと
いいます。このストレスサーと
いうのは人によって違います。

ある人にとってストレスと感
じるようなことがらが、ある人
にはそうでないということがあ
るわけです。
年を取って、二人きりになっ
て、つれ合いのお茶の飲み方が
気になってしょうがないという
ようなことは、日常よくあるの
ではないでしょうか。

年齢によってストレスサーは
変わります。自分の一生の中で
も、変わります。立場によつて
も変わります。とにかく、70%
も80%の人がストレスを感じて
いるといわれています。ストレ
スはなぜ悪いかといえますと、
ストレスそのものはさして問題
ではないのです。同様に糖尿病
もさして問題がないといわれて
いますが、合併症が問題なので

しょう。目が悪くなる、足腰立
たなくなる。脳溢血になること
があります。
ストレスもそうなのです。日
常生活の中では、病気の原因と
してはそう強く意識はしていま
せんが、ストレスが、何かの引
き金になるということです。
「生科学」という学会で、「ス
トレスを科学する」という研究
書を出しました。それを見ます
と、もの凄いな病名が羅列され
ています。十二指腸潰瘍、癌、円
形脱毛症、アトピー、顔面神経
痛、腰痛、糖尿病というように、
私たちが知っている、または回
りの人でもっている病気のほと
んどの引き金になっているので
す。ストレスは、なければいい
に越したことはありません。し
かしストレスが弾みになって頑
張って新しい人生が開けるなど
ということもよく聞きます。ス
トレスが必ずしも悪いことでは
ないという人もいます。けれど
も、一般的にいふならばストレ
スは悪い方がいいわけです。
ストレスに三つの段階があり
ます。

次号には、このそれぞれの段
階についての特徴として「警告
期」「抵抗期」「疲癒期」の説明
と対症療法について考えてみた
と思います。(続)

サークル交流

みんな元気!

公民館活動から自主サークルとして生まれ変わり、四年目を迎えようとしています。

会員は、三十代から六十代と幅広いのですが、二十五名、体を動かす事が大好きで、ポップス、演歌の曲に振りをつけたリズムダンスに軽快なステップを踏み、日頃の運動不足を補い、頭の体操とストレスの解消になり、そして年齢に関係なく誰もが気軽に楽しめるというのがいいですね。



ステップを間違えて一人苦笑いする場面もありますが、これも愛嬌です。レクは、この高さまで手を上げ、足を曲げてという決まりがないので、どなたでも楽しめます。

今年からは、レクスボートの分野にも挑戦です。パンプ、インディアカなども取り入れています。

体を動かす事はかりでなく、春には黄桜の丘で花見、納涼会、Xマス会等、自慢料理を持ち寄り会員の親睦も深め合っています。無理なく楽しむサークルです。

(レクリエーションサークル 山田 良子 記)

ひろがれ「歌声」

年齢を超えて

栃尾市コーラス「ルビー」

昭和六十二年発足の当合唱団、そろそろ十年を迎えようとしております。最初地元中学の音楽の先生(国立音大声楽科卒)のソプラノの感激したママさんたちが、「私達も唱いたい」と言い出しスタートいたしました。やがて御主人や息子たちも参加した混声合唱団になっていき



ました。現在は地域の子供たちも加わり、地元のアマチュア声楽家に指導を受け、年間一回の地元室内オーケストラとの合同定期演奏会(栃尾市民会館で二回公演)や栃尾市の音楽祭、地元の芸能祭等の秋のシーズンに向け、毎週月曜日に練習しております。合唱は西洋音楽の重要な基本の一つであり、仲間づくりに通じます。ですからオーケストラの連中も時には楽器を置いて合唱に参加します。

せまい地域ですが、歌を通じて仲間が、すてきな地域文化の形成に役立ち、いわゆる「活性化」につながることを祈ります。筆を置きたいと思えます。

(栃尾市公民館上塩谷分館「ルビー」指揮者岸田 泉 記)

三条市大崎公民館主任

五十嵐 護 氏

三条市の東部、大崎山のふもとにある地区公民館である。

今春四月、愛称「マモちゃん」と親しまれた水道局の「顔」が公民館の「顔」となって4ヶ月が経過した。現在、事業係として毎日おそくまで孤軍奮闘中である。社会体育の経験はあるが社会教育の経験はないと本人は謙遜する。

教委・税務・水道と直接市民との関わりが多い



市民との関わりが多い

素顔拝見

吉田町公民館栄養士

江口知也子 氏

町職員になって四年目、町職員では若手職員であるが、公民館ではだいたいな大事な中堅職員である。

公民館の講座三五教室の加入申込の受付、毎回の欠席者の連絡、教室で使用する材料の注文や配達された材料の確認や保管、頼まれて各教室の会計の手伝い、中途加入者へのアドバイスや講師への紹介。いつも明るい笑顔で来訪者に応待している公民館のアイドルである。団体による公民館使用も一か



月三〇回程度で、延べ七〇室程になる。町主催の国際交流会や町教委主催の県外学校との交流会もある。気持よく集合が行われるようにこまめに連絡したり手伝ったりして、見えな

い根っこで公民館活動を支えている。親切な良きアドバイザーとして、ますます彼女は忙しくなりそうである。悩みは土曜も日曜も勤務のため、友だちや恋人との時間がもたなくいか。 (吉田町公民館長 金子 正 記)



良寛さまと星めぐり

してみませんか

新潟県立自然科学館

特別展示品では

タイムマシンパス

「サン・クルーザー」

を用意しています。

期間 9月23日(祝)～10月

31日(火)3D立体シミュレー

ションで「太陽への旅」を紹介

します。

テーマは「良寛さまと星めぐり」
9月9日(土)～12月3日(日)

1 内容

健太と佳代は、ふとしたことで江戸時代にタイムスリップ。そこで思いもよらず良寛さまと出会います。ちょうど満月の晩でした。さっそく良寛さまとの楽しい秋の星めぐりが始まります。

それは二人にとって、とても
こころあたたまるひとときです。

2 投影回数

平日は2回、第2・4土曜日は3回、日曜・祝日は5回投影
します。

3 観覧料

入館料を含めて、大人700円、小・中学生400円、幼児は無料ですが観覧券が必要です。

惠贈資料紹介

- 広報「よしだ」西蒲・吉田町
- 「ゆきぐに」(公民館報)広報「ゆきぐに」南魚・湯沢町
- 広報「村松」中蒲・村松町
- 広報「おぢや」小千谷市
- 広報「かめた」中蒲・かめた
- 公民館報「新生」北魚・入広瀬村
- 広報「ひろかみ」北魚・広神村
- 公民館報「さんぼく」岩船・山北町
- 広報「かわにし」中魚・川西町
- 広報「つなん」中魚・津南町
- グレステン「とちお」栃尾市
- 「小須戸公民館報」広報「こすど」中蒲・小須戸町
- 「野鳥新潟」県野鳥愛護会
- 広報「やまと」南魚・大和町
- 館報「赤泊」佐渡郡・赤泊町
- 市報「にいがた」週刊 新潟市
- 広報「ゆのたに」北魚・湯之谷村
- 公民館報「しおさわ」南魚・塩沢町
- 社会教育だより「聖籠の杜から」北蒲聖籠町
- 短歌集「やまなみ」41巻第8号
- 通巻四九〇号 東頸・牧村公

紹介書

地域づくりの知恵の宝庫

地域づくりハンドブック

平成七年度版 一七六頁、A4版
編集 新潟県企画調整部地域政策課
発行 財団法人ニューにいがた振興機構



地域づくりの事業紹介
地域づくり関連事業集
計一覽

地域づくり関連事業紹介

県内市町村の地域指定
の状況
事業名さくいん

右のような内容で、
各市町村が、それぞれ
の地域づくりを進める
に当たって住民の要望
を実現し、地域の課題
を解決するための総合
的な地域づくりのため
に有効適切に活用する
に価するブックであ
る。例えば事業紹介で
は、山北町、松代町、
川口町、津川町、入広

また、地域づくり関
連事業紹介では、「雪」
「道」「アドバイザー」
「安全・防災」「情報
化」「地域づくり関連情
報の提供」「生涯学習、
人材育成」「交流」など
20項目の紹介が具体的
になさかれていて関心を
そそる。

問い合わせ—財団法人
ニューにいがた振興
機構—新潟市新光町7
番地2 新潟商工会館
6階(電話〇二五—二
八四—〇八〇八)

◆ 県公民館大会が終って五日が過ぎました。不順な上に厳しい暑さの夏でした。
秋のスポーツ、文化活動等が開始されている多忙の毎日とあります。
多くの市町村から続々と情報や広報をお寄せいただいで活躍のようすがよくうかがわれます。お元気に活躍されますことを祈念しています。(鴨井)

あとがき

発行所 新潟県公民館連合会
〒951
【新潟市川端町2-9・県林業会館内】
【TEL・FAX (025)224-6073】
発行人 会長 細川 仁
編集人 事務局長 鴨井 三郎
【定価1部150円 年共1,800円】